

日本学術会議 in 宮城 開催報告

第 25 期東北地区代表幹事 佐藤 嘉倫

日時：2022 年 11 月 5 日（土） 10:30～16:55

会場：東北大学片平キャンパス

第一部幹事会懇談会 部局長会議室（片平キャンパス）

※対面とオンライン（Zoom）によるハイブリッド形式で開催

第二部公開学術講演会 片平さくらホール（片平キャンパス）

※対面とオンライン（Zoom）によるハイブリッド開催（関係者のみ現地参加）

令和 4 年 11 月 5 日（土）に、日本学術会議と東北大学の共催により、地方学術会議「日本学術会議 in 宮城」を開催しました。2020 年度より、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、オンラインで地方学術会議が開催されておりましたが、2 年ぶりにオンラインとの併用という形で、対面形式での地方学術会議を開催することができました。

地方学術会議は、日本学術会議がその核としての幹事会（懇談会）を地方で開催し、地方関係者との意見交換を行い、より一層強力に地方における学術振興を促進することを目的として毎年全国各地で開催しているものであり、対面形式で開催するというところに大きな意義があると考えます。

今回、2 年ぶりに顔を合わせての意見交換や講演会を、ここ宮城県で開催できましたことに大変嬉しく感じるとともに、本開催にあたりましてご協力頂きました関係者の皆様に改めて深く感謝申し上げます。

【第一部 幹事会懇談会】

第一部は、「ニュー・ノーマル時代の研究教育の在り方」というテーマで、日本学術会議幹事会構成員、東北地区会議会員・連携会員、今回のテーマに関連のある東北地区産学官代表者の先生方にご参加いただき、現地参加者 14 名、オンライン参加者 14 名、合計 28 名で意見交換を行いました。

本テーマの意見交換に入る前に、日本学術会議の梶田隆章会長から開会のご挨拶、続いて、懇談会参加者による自己紹介を行った後、引き続き梶田会長より、日本学術会議の活動状況についてご報告がありました。

その後、東北大学情報科学研究科の堀田龍也教授より、今回のテーマに関連し、「ニュー・ノーマル時代に向けた初等中等教育の情報化の現状と課題」と題して、2020 年新型コロナウ



ウイルス感染症発生当時の日本の小中学校における ICT 整備・ICT 利用の遅れの現状、2019 年 12 月に補正予算が措置された国の GIGA スクール構想の概要、今後の初等中等教育の情報化に



向けての課題等について話題提供があり、これを皮切りに、活発な意見交換を行いました。

意見交換では、情報化が進んだ教育現場における情報セキュリティの在り方、デジタル教材やオンライン教育の地域格差を失くすための取組、デジタル教育を推進するに当たって教える側の人材育成の重要性等について意見が出されました。それと同時に、今後オンライン教育が一層充実した場合であっても、人と人とのコミュニケーションの基盤はやはり「対面」であり、元々対面での交流があるからこそオンラインの活用の意味があるといった意見も多数あがり、オンラインの良さを取り入れながら直接的な人と人との交流をどのように残していくかが今後の課題であるということについて、本懇談会を通じて改めて確認することができ、非常に内容の濃い有意義な懇談会となりました。

【第二部 公開学術講演会】



第二部は、「積雪・寒冷地域における暮らしのこれまでとこれから—持続可能な発展のための氷雪圏からの視座—」というテーマで、東北大学片平キャンパス片平さくらホールでの現地参加とオンライン参加のハイブリッド形式で公開学術講演会を開催いたしました。

初めに、日本学術会議の梶田会長及び東北大学の 大野英男総長より開会のご挨拶をいただいた後、5名の先生から講演をいただきました。



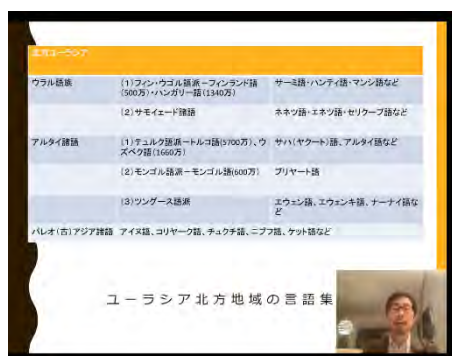
まず、東北学院大学教養教育センター所属の伊藤大介助教より、「昭和初期の雪害運動について」と題して、日本において多量の雪が毎年降る環境を弊害や障害として捉え「雪害」という概念で表現するようになった経緯、雪害を克服することを目的とした「雪害運動」という社会運動が山形県選出の衆議院議員、松岡俊三によって提唱されたこと、雪害運動が日本の近代化の整備とともに拡大していったこと等が、当時の時代的背景とともに紹介されました。

次に、日本学術会議連携会員であり、岩手大学農学部所属の下野裕之教授より、「北国の農業を支える寒さ、涼しさ、雪の恩恵」と題して、寒さに弱いイネが、寒さと共存するためにこれまで行われてきた様々な技術改良が紹介されるとともに、春作業の軽減にもつながる稲作の新技术である「イネの初冬直播き栽培」、寒さを利用して甘い野菜を作る「寒締め技術」、温暖化が原因で生じる越冬したイモが雑草化する「野良イモ」駆除に役立つ「雪割り技術」が紹介されました。



休憩を挟んだ後、防災科学技術研究所雪氷防災研究センター雪氷環境実験室所属の根本征樹室長より、「雪氷災害と雪氷環境およびその変化について」と題して、まず、大雪、雪崩等をもたらす人的被害、事故、物流への影響など雪氷災害の現状や最近の被害状況が述べられました。その後、ここ20年で冬の初めの集中降雪が増加するなど、雪の降り方が大きく変化している実態や温暖化の影響により雪質・雪氷環境が変化していることより、新たな災害（除雪の遅れ、農業・観光への影響）が発生している状況について紹介されました。また同時に、雪は地球の気候を安定させるのに役立っているというプラスの側面についても紹介されました。

次に、広島大学大学院統合生命科学研究科所属の岩本洋子准教授より、「大気中の微粒子とその気候影響-積雪・寒冷地域での大気観測例を交えて」と題して、待機中に浮遊する目に見えない大きさの粒子であるエアロゾル粒子が雲粒の核として働き、雲の形成に関わっていること、エアロゾル粒子と雲の相互作用による地球の冷却効果を正しく理解することが将来の地球変動予測の精度を高めることにつながることで、雲凝結核数濃度の有効な観測方法、地球工学（ジオエンジニアリング）における地球温暖化対策等が紹介されました。



最後に、日本学術会議東北地区会議会員であり、東北大学東北アジア研究センター所属の高倉 浩樹教授より、「氷の文化誌-永久凍土の恵みと災い」と題して、一年の半分以上が雪と氷に囲まれている東シベリアのレナ川中流域で暮らすサハ人が、寒冷環境の中で生活するために昔から行っている「飲料氷取り」「氷下漁」という生業活動について紹介されました。その後、氷の融解スピードが時間をかけて行われることは永久凍土で生活をする人々にとって文化を作り出す恵みの力となる一方で、昨今の地球温暖化による急速な凍

土の融解は、社会を破壊する災害となっているということが述べられました。なお、高倉教授は現在フィンランドで研究活動中のため、オンラインによる講演・参加となりました。



講演終了後、5名の講演者の先生方への質疑応答が行われました。オンライン参加者からはZoomのQ&A機能を利用してテキストで多くの質問が寄せられ、また現地参加者からもリアルで多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされ、講演会は盛況裏に終了となりました。

当日は、現地参加された日本学術会議関係者、東北地区産学官関係者の他、オンラインで全国からおおよそ80名の参加がありました。また、11月9日～30日まで本講演会をオンデマンド配信し、期間中、約100名の方から視聴がありました。



今回、「寒冷地域」という東北地区ならではのテーマで、かつ歴史学、社会人類学、農学、雪氷学、環境学と多岐にわたる分野の先生方からご講演をいただき、まさに現代に必要な総合知による具体例を示す公開学術講演会の開催とすることができました。

多くの方々のご支援により地方学術会議を開催することができましたこと、改めて感謝申し上げます。

